

和 而 不 同

『人はひとり。だからこそ、ご縁を見つめたい。』— 西本願寺のいわゆる【タグライン】と称される言葉である。「今後、西本願寺の社会的な役割を広く内外に伝えるため」（公式見解より）、場面

に依じて用いられていくとのこと▼とある本に『孤独とは独りの時に感ずるよりも、人がいるときに感ずることの方が多し』と私は考える』とあった。〈朝のリビング。『おはよう』に返事が無い。そこに家族が座っているのに〉そんな一例も▼無論、つながり（縁）が助けとなる現実も大いにあるだろう。一方で、人と関わりがあることと孤独の解消は、必ずしもイコールとはならないこともある。そして、縁は出会いだけではない。別れもまた縁である。この所もよくよく見つめたい▼【独】の字は、「桑の葉にくっついて離れない（虫）」＋「他と迎合しない（犬）」だそう。すると『独り』とは、単に多数内のひとり（孤独）というよりむしろ、ある種の自己執着のような自らが背負う、いわばいのちの本質としての姿ともいえるのかもしれない▼それは、決して他と取っては代われないものを恵まれていることでもある。ここに正しい意味を与えるのが仏教の教えなのだ。

